

居延地区の現状と新出漢簡情報

著者	大庭 脩, 鷓飼 昌男, 吉村 昌之, 門田 明
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	29
ページ	A23-A51
発行年	1996-03-31
その他のタイトル	Recent seen of Ju-yan District and Some Information on Newly found Han Wooden Strips
URL	http://hdl.handle.net/10112/15977

居延地区の現状と新出漢簡情報

大庭 脩 鵜飼 昌男
吉村 昌之 門田 明

1995年8月16日から23日の8日間、関西大学漢簡研究会（代表、大庭脩）のメンバー3名（鵜飼昌男、吉村昌之、門田明）は、文部省科学研究費国際学術研究（共同研究）【平成6年度、1992～93年出土敦煌懸泉置漢簡の研究 課題番号06044211】の助成を受けて、中国甘肅省蘭州から内モンゴル自治区額濟納旗を訪問する機会をえた。以下はその報告である。

北 京

【8月10日（木）】 午前に関西空港を JAL で出発し、昼近くに北京に到着。今回の旅行の主目的は、甘肅省蘭州市の甘肅省文物考古研究所と内モンゴル自治区額濟納旗居延地区の訪問にあるが、中国各地での文物情報を得るため北京の旧知の中国文物研究所と社会科学院歴史研究所を訪問することも重要な目的であった。北京での宿舎になっている梅地亜（MEDIA）賓館は、地下鉄「軍事博物館前」駅から徒歩約7分ほどに位置する交通至便地にある。翌日からの予定を決めるために、宿舎から中国政法大学の徐世虹氏と社会科学院博士課程院生韓健平氏に連絡を取る。北京での活動は上記の二つの研究機関訪問の他、出発直前に大庭脩先生より伺っていた河北省の満城漢墓と北京市郊外の大葆台漢墓の見学を実現したかった。特に満城漢墓は日本ではまだ開放されていない遺跡といわれており、かなり地形的にも難所であると聞いていたが、高速道路の開通により北京から日帰りで往復が可能となったため、保存状態の良い漢墓として一見の価値があるという。この二つの漢墓見学を最優先に北京滞在の予定が決定された。

【11日（金）】 初日の訪問は、五四大街の旧北京大学紅樓にあった国家文物局古文献研究室が発展改組してできた「中国文物研究所」である。北四環路にほど近い七階建の新築間もない瀟洒なビルの中で李均明・劉軍・趙桂芳の三先生にご案内を頂き、簡牘関係の最近の研究状況や発掘情報について研究交流をした。昼食を所長の張羽新先生はじめ旧知の諸先生といただき、午後には雍和宮と国子監（首都博物館）へご一緒していただいた。

【12日（土）】 早朝、宿舎へ謝桂華先生自らがおいでになり、河北省の満城漢墓へご一緒し

ていただけることになった。満城漢墓は中国国内でもまだ訪れる人は少ない模様で、謝先生はじめ今回の北京滞在中のお世話をいただいている徐世虹・韓健平両氏も未見とのことであった。一般に中国では人脈が物を言う世界であり、各地方においての便宜を得るためにはその地方の研究者に案内を請う必要がある。河北省満城県では謝先生のご紹介で河北大学の趙平安氏にお世話をいただくことになった。趙氏は中山大学の張振林・曾憲通両先生の指導を受け、「隸弁」を研究して博士論文を提出した古文字学の若手研究者で、謝先生によれば間もなく社会科学院歴史研究所の研究員として北京へ転任するとのことである。連絡も早々に、徐世虹氏のお世話で借り受けたワゴン車に乗り、北京＝石家荘を結ぶ京石高速を利用して一路河北省保定市へ向かった。およそ2時間ほどの快適な道で保定市に到着、趙氏夫妻との連絡を待つ間に直隸総署（保定市）博物館を見学し、以後の予定は昼食をとりながらということになる。私たちは初対面と思っていたが昼食時の歓談のなかで、91年の蘭州での国際簡牘研討会に趙氏も参加されていた由で、昨年の湖南省博物館の陳松長氏・湖北省博物館の劉信芳氏といい、今更ながら蘭州での学会における交流の意義を認識したものであった。満城漢墓へは趙氏が午後の大学講義があるために同行できず、夫人にご案内をいただくことになった。

保定市内から田園地帯を抜けて車の前に獣が伏せたような形の岩山が見えた頃、麓に博物館のエリアを示す壁が岩山を囲むように連なり、山の頂きに廟堂のようなものが遠望できる。満城漢墓博物館である。麓の駐車場から文物管理所の小さな建物に向かい、事前に謝先生からの連絡によって保定市満城県旅游局副局長の康健中氏に案内を請うことになった。聞いていた通り岩がゴツゴツと顔をだして山道を登るには険しい地形であったが、二人乗りリフトが山頂まで運行していたので、周りの風景をゆっくり眺めながら山頂にたどり着くことができた。リフトの終点から廟堂までの小道には、漢墓発見のきっかけになった小穴が見られ、その先に満城漢墓の墓道が岩肌を開鑿して造られている。

満城漢墓とは、前漢景帝劉啓の子で武帝の庶兄にあたる中山靖王劉勝と王后竇綰の墓である。劉勝墓は全長51.7m、墓室の最も高いところまでは6.8m、容積2700^mという報告書の記述からだけでも、その規模の大きさと工事の困難さを十分に想像できるものであったが、現地において実見した印象はまさに「地下宮殿」であった。頑丈な洞窟内部の岩肌に人の手になる削り跡を確認しながら、湿った冷気と静かな水音のため自然に天井を見上げてしまい、その高さに前漢最盛期の諸侯王の権力を感じた。劉勝は紀元前154年に初代の中山王に封建され、武帝の元鼎4年（紀元前113）に死んでいる。豪華な副葬品二千八百余点が奇跡的に残り、中でも2498片の玉片を直径0.5mm純度96%の金の撚糸で繫いだ劉勝の金縷玉衣は、その精緻な工芸技術と豪華さにおいてつとに有名な遺物である。墓室内では水滴の落ちる中に副葬品の一部

が無造作に置かれており、その管理感覚に私達は神経質になってしまうが、何よりもこの構造物自体が貴重なのであろう。日本ではかなり有名なこの漢墓が中国のガイドブックにさえ取り上げられず、訪れる人もそれ程多くない現状は宣伝不足に尽きる。遺物のほとんどは河北省博物館にあるとのことであるが、この漢墓だけでも十分に一見の価値はある。これからは北京郊外の観光の新しい目玉商品として脚光を浴びることであろう。文物管理所の責任者の康建中氏との歓談では、私たちはその素晴らしさや観光事業への意見を率直に述べることで、康氏の見学に際しての労に報いたかった。特にお土産物として「長信宮灯」や「雁足灯」のレプリカを揃えれば、外国人観光客には必ず売れる品物であろうという我々の意見に、康氏は意外の表情であったが今後どうなるであろうか対応を心待ちにしたい。歓談のおわりに中国社会科学院の연구원である謝先生から、この漢墓に対して高い学術的評価が表されるや康氏の表情が一変して明るくなったことは、単なる褒辞に抱く喜びの様子以上の何かを私は感じ、中国での文物管理上の難しい現実を垣間見たように思えた。

【14日（月）】 雨になったが、午前には文物研究所の紹介で紫禁城を訪れた。紫禁城では故宮博物院副研究員で明清時代の家具・建築が専門の胡徳生氏にご案内いただき、各展示物と共に特に一般公開されていない「殿版」として有名な武英殿を見せていただいた。武英殿等の建物は現在「国際文物交流センター」となっているが、その名称とは異なり文物の修復に重点を置いた倉庫のような雰囲気は漂い、武英殿などは朽ちるに任せた非常に悪い状態にあったのには驚かされた。また、故宮の壁の赤い色は、その原料になる土が入手困難なため復旧に苦慮しているとのことである。華やかな故宮の裏の朽老たる武英殿を辞する折に、奇遇にも甘肅省博物館の初世賓先生にお会いした。この後の蘭州訪問でお会いできるものとばかり思っていた所、初先生はこれからアメリカでの展覧会の打合せのために渡米されるとのこと、思いがけず故宮で旧交を暖めることができたことは、一時のこととはいえ武英殿での奇縁を喜んだ。

午後は、中国社会科学院歴史研究所を訪問し、謝桂華先生をはじめ昨年お会いした若手研究者の陳勇氏・劉楽賢氏と研究交流をすることができた。近年、歴史研究所には簡帛研究センターが設立され、謝先生はその主任を務められており、私達にとっては非常に重要な訪問地である。日本での情報では、1993年に江蘇省東海県の漢墓から郡の上計に係る漢簡が発見されたと聞いており、その話が研究所では専ら話題となった。

帰国後の10月29日付「中国文物報」にもとづいてその時の話をまとめると、93年2月に東海県温泉鎮尹湾に11座の漢墓があり、その内の6座を緊急発掘したとのことである。発掘には連雲港市博物館・東海県博物館があたり、簡牘の整理と研究は歴史研究所簡帛研究センターと連雲港市博物館・東海県博物館が行った。3号墓が長さ6.4m、幅5.25m、深さ8mの竪穴石坑

墓の最大規模ながら盗掘による破壊がひどいという。一群の漢墓の中では6号墓が保存状態も良く出土文物も豊富であり、簡牘は1枚の衣物疏が2号墓からの出土であることを除いて、23枚の木牘と116枚の竹簡全てが6号墓からのものである。それらは総字数が約4万余字にのぼり、内容は「東海郡上計集簿」を始めとした帳簿類が6種・曆譜2種・占卜法2種・古佚書「神鳥伝」などである。書体は隷書と草書の二体あり、帳簿や曆譜には「永始」・「元延」の元号が記されていることから、前漢後期の成帝期の墓であるといえる。また、簡牘には10枚の名謁が含まれており、それによれば6号墓の墓主は「師饒」という人物であり、生前の官職は東海郡の功曹史であったと考えられている。歴史研究所における座談では、漢代の行政制度に中心的な位置を占める上計の簿録が、なぜ個人の墓に副葬されるのか、それらの帳簿にはどのような表題が記されていたか、墓主が東海郡の功曹史であるといえる根拠は何かなど、時間を忘れて質疑応答がくり返された。簡牘の正式報告は1996年に中華書局から出版されるとのことである。

【15日（火）】 朝からテレビは光復節を記念するニュースでもちぎりであった。日本でいう終戦記念日の今日、午前には北京市郊外の大葆台漢墓を廻って蘆溝橋を見学した。戦争の記憶を喚起し独立の意義を再認識するための8月15日という中国政府の位置づけは、追悼行事のみが多い日本とは大いに異なり、加害者と被害者の意識の隔たりを痛感した。日本の国際性を養うためには、この辺りの感覚の修正が必要であると考えたのであるが如何であろうか。

さて、大葆台漢墓博物館は非常に保存状態のよい大型の木郭墓全体が建物によって覆われ、参観者に見やすい近代的な陳列方法で運営されていた。1974年に発掘が始まり、墓室の構造に黄腸題奏が使われていたことで非常に有名になった。黄腸題奏とは、「木心が黄色い柏材を小口積みにして、壁面を構成した墓室」のことである。この構造は漢代の墓葬制度では、墓主がかなり高位の人物でなければ用いることはできず、棺内から玉衣片が見つかったことと関連して諸侯王級の人物と推定された。現在、墓主は燕王劉旦または広陽王劉建であろうということになっている。大葆台漢墓は早い時期に盗掘にあった模様で遺物は少ないが、殉葬車馬は比較的良好な状態で残っている。私たちは昨年に江蘇省揚州の揚州漢墓博物館を訪れ、そこでも黄腸題奏が使われた大型の木郭墓を見る機会があった。この漢墓は館内の展示説明によれば天山1号漢墓とよばれ、1982年5月の『新華日報』に「高郵天山発現一大型漢墓」と報じられたものである。この漢墓も墓全体が建物で覆われ、漢墓そのものを展示した博物館として立派なものであり、興味がおありの方にはよい比較資料となろう。

大葆台の後には、予定通り蘆溝橋を見学し急いで北京市内へ帰った。この日の午後には江沢国民国家主席が蘆溝橋を訪れる予定があり、警備の時間帯にぶつかるとかかなりの渋滞が予想され

るからであった。午後は昼食後に中国歴史博物館を参観し、この日の予定は終了した。ここに、北京での私たちの行動に便宜を図っていただいた中国文物研究所の先生方および社会科学院歴史研究所の謝桂華先生、そして終始暖かくお付き合いをいただいた中国政法大学の徐世虹、社会科学院博士生韓健平の両氏には深く感謝する次第である。

(鵜飼昌男)

額 濟 納 旗

【8月16日(水)】飛行機で北京から甘肅省の蘭州へ向かう。小雨が降っていたためか離陸が遅れ、到着は予定より1時間後の3時20分となる。蘭州は快晴であった。蘭州中川空港で甘肅省文物考古研究所の何雙全氏らの出迎えをうける。何氏は94年の冬に「大阪府立近つ飛鳥博物館」で催された「シルクロードのまもり—その埋もれた記録」展に随行された際にお会いして以来の再会である。ところが、蘭州ではゆっくりする時間もなく、帰りの宿舎となる中山路の勝利賓館で、額濟納に携行する必要最小限の荷物を一つだけにし、他の荷物や旅行用のスーツケースを預ける。夕食をとり、夕方7時15分発のウルムチ行きの特快列車に乗り込み嘉峪関へ向かう。一行は、日本からの3名と蘭州の何雙全氏そして通訳として蘭州絲路国際旅行社の陳さん(南京中山大学日本語科卒)の計5人である。この列車は鄭州からのものなので、硬座車は鈴なりの状態である。私たちは幸いにも軟臥車であったので席はあるはずなのだが、いざ乗ってみると席がない。ダブルブッキングである。しばらく陳さんが車掌と交渉すると、なぜか4人1室のコンパートが我々のものになる。おかげで快適な旅をすることが出来た。しかし、私たちの素性調査であろうか、乗警(鉄道警察)や列車長が次々にわがコンパートを訪問してくる。彼らの会話は私の中国語の能力ではとても聞き取れない。最初はやや緊張した雰囲気であったが、次第に彼らの顔にも笑みが見られるようになる。

私たち4人は、筆談を交えて話し込むが、消灯時間を過ぎたために11時過ぎに寝台に入る。

【17日(木)】7時頃に起床する。まだ、張掖の手前である。食堂車で朝食をとる。18時間の揺れの後、12時50分に嘉峪関に到着する。天気は快晴。宿舎の長城賓館で少しの休息をとり、夕方に長城博物館と明の嘉峪関遺跡の見学に出かける。1991年以來の再訪である。あとは翌日に備えて休息をとる。

1991年夏、私たちは蘭州で開催された「中国簡牘国際學術研討会」に参加し、その後に敦煌までの車の旅に出たが、この旅の2泊目の地が嘉峪関であった。4年の歳月はこの地に驚くほどの繁栄をもたらしていた。かつて、街の外れにポツンと建っていた長城賓館の周りには、アパートやホテルが建ち並び、人々の活動はいきいきとしているようにみえた。急激にはない

が、中国は着実に発展しているという感がある。

【18日（金）】 早朝6時20分、いよいよ、内蒙古額済納旗、すなわち漢代の「居延」へ向けて出発した（図1）。車は日本製トヨタのハイエースで12人乗りである。日本では8人乗りだが、改造してある分だけ座席の幅は狭くなっていて、決して乗り心地はよいとは言えない。車はず東の酒泉へ向かう（図2）。つまり、河西走廊を少し戻ることになる。かつて敦煌へ向かったときに走ったことのある道である。酒泉までは国道を走り、ここから道を分かって北東へ向かう。金塔のオアシスまでの道は概ね舗装されているが、走り出してまだ1時間少ししか経っていないのに、突然、無舗装の凸凹道になる。「これがこの先6時間も続くとなると大変だ」と覚悟したが、それはほんの一部だけで、すぐに舗装された良い道になった。内心ほっとする。金塔を出ると、額済納までは街らしい街はほとんどないということなので給油をする。

金塔の街を抜けると、暫くは木立もあり、農地も見ることが出来る。しかしそれが尽きると、荒涼とした砂漠地帯に突入する。何雙全氏の忠告に従って、水はたくさん飲むようにする。進行方向の右手に大湾（肩水都尉府）や地湾（肩水候官）があるとのことだが、残念ながら何も確認できない。ただ砂と低い山稜が見えるだけである。1時間も走るとポツンと工場がひとつあり、ここまでは舗装された道であったが、それを過ぎるといよいよ無舗装の道である。しかし、無舗装といっても砂利を固く敷き詰めてあるので、思ったほどは揺れない。車は70~80キロの速さでぶっ飛ばす。1時間走ったところで休んで遅めの朝食をとる。電信柱だけ唯一の人工物としてあるだけで、ぬけるような青空と音一つない世界である。日本では、決してあり得ない世界であろう。

今年は中国の西北地方は雨が降らなかったそうだが、私たちが訪ねる数日前に雨が降り、それもかなりの量であったようで、西から東へ向かって水が流れた跡が見られる。これを川と呼ぶにはあまりにも無秩序に流れている。道も無舗装のため、冠水して流されてしまった箇所が何か所か見られる。私たちの車も、一度、砂にタイヤを取られて立ち往生し、みんなで押してようやく脱出することができた。少しの不安を抱きながら小高い山を3つ越え一と、何氏はいうのだが、カルデラ状になっているのだろうか、5~6の山稜を越えたような気もする一、するといよいよ本格的な砂漠、パタンギリ（巴丹吉林）砂漠の中へ車は進んでいく。さすがにここでは降雨の形跡もない。360度、見渡す限りの砂と砂。地平線まで砂ばかりである。

砂漠を抜けて暫く行くと、人の気配が見られるようになる。やがてウランチューンチー（烏蘭全吉）のオアシスに入る。ここには検問所がある。私たちは外国人通行証という国内パスポートを持って通過する。額済納まではあとわずかである。ウランチューンチーを出て暫く走ると、遠くにテレビ塔が見え始める。額済納旗である。木立も見え始め、人々の往来が多くなる。そ

してノリン河を渡っていよいよ街中に入ることが出来た。

地図一といっても1930年にペリイマンが作成したもので額済納の街も載っていないものである一によると、漢代の長城線を越えたはずであるが確認することは出来なかった(図3)。午後1時50分に額済納賓館に到着する。僅かな休憩時間を挟んで、400キロ、7時間の強行軍であった。

まずは、部屋で休憩をとる。額済納にはホテルらしいところはここだけで、それも良い部屋一といっても北京や上海の2つ星以下級ではあるが一は、5つしかなく、二人ずつ別れて部屋に入る。この時はまだ水がでた。夜になると電気が止まり、それと同時に水も止まってしまう。考え方を変えれば、砂漠の真ん中で半日も水が自由になることが幸せと云うことか。その水も少し塩辛い。

現地の人は3時半まで昼休みだそうで、その代わり7時半頃まで働くのだそうである。昼の暑さからすれば致し方ないことであろう。何雙全氏の古くからの友人である、額済納文物研究所の納森所長が訪ねてこられる。夕方、少し涼しくなってから活動する事になる。

5時20分、北京ジープ(納森氏)とハイエース(私たち6人)の2台を連ねて額済納旗を西南の方角に出て、防衛線沿いに南下する。暫く南に向かって車を走らせると、漢代の烽隧跡がほぼ等間隔に並んでいるのが確認できる。30分も走ったところでA8=破城子(Mu-durbeljin)が見えてくる。額済納からは24キロの距離である。ここは私たち漢簡を研究する者にとっては、格別の地である。ここからは、1930~31年と1972~74年の2度にわたって、計1万枚を超える大量の木簡が出土し、漢代には「甲渠候官」という部署のあったことが分っている。図4はA8の平面図である。

1992年に関西大学で開かれた「漢簡研究国際シンポジウム」において、当時の甘肅省文物考古研究所岳邦湖所長が、スライドを使用して、この地を含んだ額済納河流域の漢代遺跡の簡単な紹介をされ、その報告は、大庭脩輯『漢簡研究国際シンポジウム'92報告書 漢簡研究の現状と展望』(関西大学東西学術研究所)の中に見られる。また、古くは Sino-Swedish Expedition(西北科学考察団)の報告や『文物』78-1に載せられた簡報(「居延漢代遺跡的発掘和新出土的簡冊文物」)もあって、ここがどのようなところであるのかという知識はあるものの、現実に遺跡に立つと、また感想は異なる。写真1は、A8の北西からの遠望である。

何雙全氏の説明を聞きながら、時間の経つのを忘れて記録をとり続けた。発掘直後の写真に比べると、ペリイマン氏の探査の時ほどではないが、やはり風などの影響で遺跡はかなり砂に埋まっている。遺跡の西側から東へゆっくりまわり、城の入口跡(塙門)に立つ(写真2)。遺跡の壁は、高さ30センチほどが残っているだけである。ここから遺跡の内部に入る。内部で

は東南の隅から西へ向かって歩き、西壁から北へ向かう。西北の隅には障と呼ばれるやや高い囲塀が残っており（写真3）、日干し煉瓦で積まれたものであるのがよくわかる。その一部は南に崩れ落ちている。このあたりがF16と呼ばれる、甲渠侯官の「候」＝部隊長の居住していた場所である。障の前の西北隅から少し東へ歩くと、そこがF22の文書庫である（写真4、スケールとしてタバコをおいた）。今となっては、その北壁が60センチなど残っているだけで、あとはここがF22だと聞かない限り、ここから多くの冊書を含む889枚の木簡が出土したところであるということは分からない。次に障壁の上に登る。高さは4～4.5メートル、厚さは2メートルほどであろうか。この上に立つと、周囲の様子がよく分かる。南北にそれぞれ隣接する烽隧もみえ、これならば肉眼でも狼煙や信号の旗もよく見えるし、敵襲があったのならその状態も把握できたであろう。地平線までに2つぐらゐの烽隧は確認できる（写真5）。障の内部へは、階段の跡を降りていく（写真6）。内部でも、日干し煉瓦を積んでいる状態が見られ、さらに、煉瓦と煉瓦の間には、葦などの草茎が挟まれており、一部には表面に塗られた漆喰が残っている（写真7）。遺跡の外の東から東南にかけて、破城子からは20メートルくらい離れた所にはごみ捨て場がある。ここは1974年に発掘され、T51～T59の番号が付けられた所である（写真8）。

この破城子遺跡は、私たちにとっては至上の宝庫であり、時間の過ぎるのを忘れさせるものであるが、現地の人々や私たちを運んでくれた運転手の王さんにとっては、単なる土の残骸にすぎないようで、長時間の滞在は申し訳ない気もする。しかし、ここではそんなことも言っていられない。何雙全氏の案内に従い、遺跡の東の方40～50メートルくらいの所まで歩いてみる。歩きながら何氏は地表に落ちている玉石（瑪瑙）を事も無げに探していく。永年の経験からか、これと思う石を捨てては日に翳してみる。そうすると区別が付くようである。真似してみるが、私にはどれが玉でどれが石なのか分らない。この辺りは、現地の人でもめったに訪れないようで、玉石も放置されたままである。

しかし、そうこうしている内にも日没までの時間が迫ってくる。次はさらに南のP1の甲渠第四隧へ回るとのことなので、後ろ髪を曳かれる思いで引き揚げることにする。

A8からさらに車で数分南下すると、P1が見えてくる。A8ほどではないが、一見して他の烽隧よりはやや大きいことがわかる（写真9）。北には高さ3メートルほどの烽台が残っており、その南には南北12メートル、東西14メートルほどの塙があり、内部にはいくつかの部屋があったことが確認できる（図5）。『文物』78-1の「簡報」によると、塙内は3つの部屋に分かれており、塙の外にはさらに3つの部屋のあったようだが、現在ではそれほど明確には識別できない状態である。塙壁は烽台に付随する中央部がわずかに残っている程度で、西側の状

態は悪い。東には入口が開いている。

漢代では、ここが甲渠第四隧であり、居延都尉府甲渠侯官の管轄下にあった。行政機構で見ると、都尉府の下に侯官があり、侯官の下に侯が、侯の下に隧がある。それぞれの長は、都尉、侯、侯長、隧長とよばれていた。その最下級の隧は、およそ1200メートル間隔で置かれ、5～6の隧を束ねる所として侯が置かれていた。第四隧はこの侯であり、第四侯とか第四部とよばれることもあった。ここも1974年に発掘されていて、195枚の木簡が発見されている。

しばらく見学していると、辺りが暗くなってきた。時計を見るともう8時である。もっともこれは北京時間であり、額済納旗は北京より15度西に位置しているのだから、実際には時差が1時間あるし、北緯も42度位にあるので実感はない。しかし砂漠の真真中で日が沈んでしまうのも不安であるので、P1を後にすることになった。

車は一路北へ向かって走り、北東の額済納をめざす。途中、再度A8の真横を通る。地平線に日が沈むのが見えた。8時30分過ぎ、すっかり暗くなった額済納の街へ到着し、同楽飯店にて遅くなった夕食をとる。山東風とのこと。みんな少し疲れ気味であったが、塩っぽい熱いお茶を飲むと元気が沸いてくるようだ。モンゴルの食事は質素ではあるが、肉体的空腹感と精神的満足感からとても美味しく感じられた。納森氏や何雙全氏とともに白酒を飲み干す。話も弾み、少し酔って気持ちが良くなったところで、食事を終わりにして外へ出る。空を見上げると、日本では考えられないほどすばらしい星空である。日本の子ども達に見せてあげたいと思う。額済納の町中でこの様子であるから、街の外へ出るとどれほどであろうか。

その日の夜は、11時に賓館に帰り着いた。水はもう出ない。埃っぽい体をそのままに休むことにする。シャワーはともかく、トイレが使えないのが困る。水洗トイレという文明の利器も形無しである。

【19日(土)】 7時に起床する。晴天である。体調も良い。顔を洗おうと思うが、まだ水は出ない。まず朝食をとることになった。モンゴル風ミルク茶は抜群に美味しい。何杯かお代わりをする。漢族の人たちはあまり好みに合わないようで、遠くからやってきた日本人の方がモンゴル族の人に近く思えて面白いようである。といっても、日本人の中でも、私たちだけが特殊なのかもしれないが。

8時20分に賓館を出発する。街を西に出て、一旦南に下った後、東に向かう。暫くすると、水の流れていない額済納河(イケン河)を渡る。年に数回は水が流れるようだが、今は全く干上がっている。河底は砂地である。かつては額済納河の流れも豊富で、人々も多く居住していたのであろうが、現在は道さえもないところを、ジープは走っていく。納森氏によると、この辺りには漢や西夏時代の屯田の跡が確認できるとのこと。ただ、それが何れのものかは明確に

はできないのだそうだ。すると、目前に仏塔が現れる。西夏代のもので、「一个塔」と呼ばれており、ベリイマン氏の地図の Stupa60 である。高さは6メートルほどであろうか。

ここから、さらに東に向かう。途中駱駝の群に遭遇する。恐らく野生のものであろう。45分ほど走るとK749に到着した。漢代の城である(図6)。北壁と東壁がよく残っており、高さは3メートルほどである。城壁以外に何も無い(写真10)。城外には西夏時代の遺物が散見され、特に陶器が多いようだ。納森氏の言によると、この一帯に存する遺跡の中でも大きい部類にはいるとのことである。昨日見たA8の破城子、つまり甲渠侯官遺跡よりはかなり大きなものである。しかしここが漢代にはどのような機能を持った所であったかは分からないとのことである。あるいは軍事遺跡であるのかもしれないし、あるいは倉庫であったのかもしれない。いずれにしても、いつの日か発掘されて研究される日の来るのを待たねばならない。

つぎにK710に向かう。ここは「居延城」と呼ばれる遺跡である。途中の道は、今回の行程の中でも、最も過酷なものであった。道と言っても、道らしい道があるわけではなく、荒涼とした原野を、納森氏の経験を頼りに走るだけである。時に、納森氏も針路に迷うようで、そんなときには少し小高い丘に登って方角を確かめる。ついでに小休止(写真11)。あとは、日本で言うオフロードそのものである。砂丘を越えたり、深い溝を渡ったりと車好きの私には至上の喜びである。かなり道に迷いながらも、40分ほどでK710に到着する(図7)。城壁跡がよく残っている(写真12)。南東の隅で車を降りて、歩いて探査する。城内には、瓦や陶片といった漢代の遺物が散乱している。特に石臼が目立つ。これは、ベリイマン氏の報告書にも載っているものである(写真13)。目の前に無造作に遺物が置かれていると、感覚が麻痺してしまいそうで、有り難みも何も無くなってくるのが怖い。しかし、これは紛れもない漢代の遺物であり、今から二千年前の人々が実際に使用していたものなのである。そう思うと改めて感動が沸いてくる。写真の中に一緒に収まることにする。ここも未発掘ではあるが、規模としてはK749よりも大きいようである。しかし、ここが漢代の居延県城であるという確証は今の所無い。ここも時に訪れる洪水(?)によって遺跡や遺物がかなり流されており、何雙全氏の説明では、漢の城ということではあるが、実際には遺跡の表面に西夏時代のものと思われる陶片が発見される。

12時00分、K710を出発し、カラホト=黒城へ向かう。カラホトは北緯41度45分、東経105度5分の位置にあり、約1時間に到着する。途中の道は、相変わらず厳しいものだが、額済納かそ直接向かえばこの様なことはないそうである。現在は城の四方を鉄条網で簡単に囲っているが、西南隅は口が開いていて、入ることには全く問題はない。日本のように入場料何ぞという無粋なこともない。もっとも此処を訪れる人などいないのかもしれないが、私たちが訪れたと

きには先客の一行がおり、彼らが引き揚げてしまうと、あとは我々だけとなり、引き揚げるまで誰もやっては来なかった。鉄条網の切れた入り口には「内モンゴル自治区重点文物保護単位 額濟納旗黒城 内モンゴル自治区人民政府 立 一九八八年六」と記した碑が建っている。黒城の西南城外にある元代の建造物の中に入り昼食を取る。ここはかつて1980年に放送された、NHKの「シルクロード」によっても紹介されたこともあり、映像としても見知っている数少ない遺跡の一つである(図8)。城壁の西北隅にある元代の仏塔は、かつての映像やベリマンの報告書では、南側の一つは完全に崩れていたが、現在では綺麗に修復されており、表面は漆喰で化粧がほどこされている(写真14)。まず城壁の上に登り、北に向かって歩いて仏塔まで行く。近づいてみると、表面の漆喰もやや剝落しており、厳しい自然環境が想像される。外からは2つに見えた塔は、中にはいると、北側の塔の裏にあと2つの塔があり、合計4つであることが分かる。また、小さな塔の間には塔とは言えないが小さな構造物が見られる。視線を城内に向けると、その規模は今まで見てきた漢代の遺跡と違いとりわけ大きなものである。四辺の城壁と東西2つの門はほぼ完全に残っているし、城内の建築物も所々確認できる(写真15)。すでに簡単な発掘調査は行われたが、報告は未発表とのことである。中国の出版事情は日本では想像できないくらい悪いようである。城壁を降りて城の中心部へ向かう。住居跡や寺院跡が確認できる。80年のNHKの映像よりも、一層破壊が進んでいる様に思われる。遺跡の表面には西夏時代の石臼や陶器、奉納用の仏塔などが、さらには絹織物の遺物が散乱している。時には、おそらく羊であろうが、動物の白骨が横たわっていたりする。城内はとにかく広く、時間を掛けてゆっくり見る。一部は砂で埋まっていることもあり、完全な姿を見ることは出来ないものの、繁栄していたであろう時期の雰囲気は十分理解できる。東門から外へ出てみる。一面の砂漠であるが、かつての交易路であったろう道の跡がかすかに残っている。城内に戻って寺院跡の日影に腰掛けて小休止。日影にはいると涼しい風が吹いてきて気持ちよい。

3時45分、黒城を出発する。K789を右手に見ながら額濟納へ向かう。K789は漢から唐にかけての遺跡だが、現在確認できるのは唐代の遺物が多いとのことである。しばらくして額濟納河の河底を北に向かって走る。河を抜けると駱駝が二頭、目の前に現れる。ここで少し休息をとるが、近くのモンゴル族のゲルを見せて貰いに行くことになった。この辺りのモンゴル族はすでに定住化が進んでおり、普段は定住用の住居に居住している。しかし家の横に二張りのゲルが置かれている。納森氏が交渉に当たるが残念なことに、大人は留守で子どもしか居ないとのことだったのでゲルの中に入るのはあきらめる。

4時55分、額濟納旗に帰着する。少しの休憩後、賓館で夕食をとる。白酒で乾杯。食後、納森氏を囲んで色々な話をするが、彼は大学時代に日本語を勉強したことがあり、片言ながらし

ャベる発音は非常にきれいである。彼には日本語を、私たちにはモンゴル語をという双方が教師となり、話が弾む。11時頃に就寝する。

【20日（日）】 7時に起床。朝食後、納森氏の見送りをうけて、額済納を出発する。あとは往路と同じ道をもどる。無舗装の長い悪路をひた走る。

3時15分、ようやく嘉峪関に到着する。夜9時7分発の直快244で蘭州に向かう。19時間の長旅である。

【21日（月）】 4時25分、蘭州駅に到着する。そのまま勝利賓館へ向かう。夕食は今回お世話になった蘭州糸路国際旅行社の呉愛華社長と共にする。その話では、今後5年をめぐり、居延・黒城のツアーを計画中とのことである。

（吉村昌之）

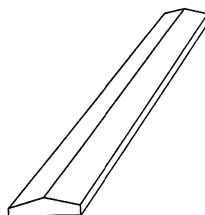
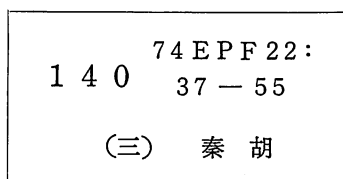
蘭 州

【8月22日（火）】 私たちは9時に甘肅省文物考古研究所を訪問した。ここには、居延新簡や最近発掘された懸泉置漢簡などが保存されている。私たちを出迎えてくれたのは、謝駿義所長、李永良副所長、何雙全氏、それと諸々の事情から蘭州に残って私たちのために奔走してくれていた陳波氏（関西大学漢簡研究会のメンバー）であった。所内の一室で挨拶を交わしている時に、龐述森氏、魏懷珩氏、王京科氏なども挨拶に来られた。謝所長を始め、いずれも1992年の「漢簡研究国際シンポジウム」の時や1994年に近つ飛鳥博物館で「シルクロードのまもりーその埋もれた記録」展が開かれた折りにお会いしている面々である。午前中は、この一室で居延新簡を見せてもらうことになった。参考までに、見た漢簡の番号を記しておく。

甲渠侯官遺址出土：E・P・T65：95～117， E・P・F22：37～55， 同61～69， 同83～124， 同125～152， 同153～172， 同173～185， 同186～201， 同236～257， 同258～269， 同270～293， 同334～360， 同451～465

肩水金関遺址出土：E・J・T1：1～23， 同24～64， E・J・T2：1～28， E・J・T3：47～92， 同93～117

続き番号であるのに分けたのは、上のひとまとまりの番号のものが一つの箱に納められているからである。臙脂色の箱で、大きさは35cm×28cm、上のふたにガラスがつけられ、箱を開けなくても中が見えるようになっている。この箱に次のようなラベルが付けられて、箱と中の漢簡を捜すのに便利ようになっている。「秦胡」は簡の内容に関係のあるもので、ラベルとは別筆で青インクで書かれていた。居延新簡を納めたこのような箱は300箱くらいあるとのことであった。また整理の結果、金関出土簡は11000枚ほどあるそうである。



午後は、2時40分から4時40分ごろまで、現在、漢簡の整理研究を行なっている部屋で、懸泉置漢簡を見せていただいた。研究室は午前中の建物の隣りにあり、建物の中庭には積薪が敦煌から運んできて置いてあった。2.2m四方の大きさで、もともとは9層あったが、今は半分ぐらいが残っているとのことであった。葦の束を縦と横に一層ずつ積んで作られている。

漢簡を整理研究しているメンバーは、何雙全氏、張徳芳氏、張俊民氏の3氏である。懸泉置漢簡は、文字の書かれた簡が2万、現在17000枚の整理が終わっている。あと3000枚あるが、見えにくいものが多いそうである。(その後、11月の連絡で整理が完了したとのことである。)張俊民氏の話では、積文するときに、見えにくい場合は水をかけると見やすくなるそうである。確かに、を見せていただいたが非常に見えにくいものがある。以前、奈良の国立文化財研究所や台湾の中央研究院歴史語言研究所で赤外線カメラを使用して木簡を見たことがあるが、あのカメラがあれば、積文の作業はより速やかに行なわれ、彼らの余分な労力も不必要となるであろうと思った。国際共同研究の必要性を感じた。私たち日本にいる研究者も単に中国の作業を待つだけでなく、積極的な援助が必要ではなからうか。

懸泉置漢簡は、後漢の和帝の時代のものであるが、多くは前漢のものである。漢簡は5簡ずつ、大きなカード(簡牘檔案簿という)に記録されている。そのカードには総番号、原簡番号、形による名称(簡とか觚など)、書かれている書体(隸とか草)、積文、数量、材質、寸法、紀年の有無、分類(律とか詔書、曆書)などの欄があり、それぞれ記入されている。整理がまだきちんとできていないということもあって、懸泉置漢簡に関しては適宜、箱を開けて見せてもらうというかたちになった。この中で興味を引いたのは、穀物の受け取り(出入)を記した簡である。張俊民氏の話だと、この簡は裏がデコボコになっており、縦に二つに割って割符として使用したと考えられるものが多いという。事実、二つがぴったり合わさるものがあるそうである。この話の中で、側面に刻歯があることについて、靱山明氏の刻歯のさまざまな形は簡に書かれた数字を表しているという説を紹介した(1994年12月に開かれた木簡学会の研究集会で報告。のち『木簡研究』第17号[1995年刊]に「刻歯簡牘初探——漢簡形態論のために」と題して掲載)。彼らは最初は、刻歯は割符のためだからと半信半疑のようであっ

たが、一緒に実物にあたって検討していくうちに、靱山説の妥当性が確かめられるかたちになった。全てにあたって確かめたわけではないので万全とは言えないが、最終的には、釈文を発表する際には何らかのかたちで、刻齒の形を注記したいという話になった。靱山氏は実物の調査によってこの説を立てられたようであるが、実際、漢簡の実物にあたってみると、図版ではわからないことが多くあることに気がつく。その例を二つ紹介してみたい。

今回の懸泉置漢簡の調査で、字の書かれていない、言わば漢簡の材料にあたるものがたくさん出土していることがわかった。総数で約2万点あるそうである。(字の書かれているものと合わせると、約4万点となる。)一部を見せていただいたが、木の枝のままのものや再利用と思われるもの、きれいに整形してあって未使用のものなど、さまざまなものがあつた(写真16)。その中で、木の枝が簡の材料としてあるのを見て、思いついたことがある。馬圈湾出土簡などの敦煌漢簡に多いのであるが、中国の研究者たちは觚と分類しているが、いわゆる觚とは少し形の違う三面体の簡がある(上図参照)。この簡の裏というか、底面にあたる部分を見てみると、木の芯が通っているものがあることに気がついた。敦煌漢簡の中には図版で見ると、真ん中に黒く線を引いたように見えるものがある。これも実は木の芯である。そうすると、これらの簡は太い材木から作られたのではなく、今回見た木の枝のようなものから作られたのである。枝を中央で縦に割ると、木の種類にもよるが、真ん中に芯が残る。そのあと樹皮を削って平面を作ると、三面体の簡ができるというわけである。居延と比べて敦煌にこの形が多く見られるのは、太い材木が入手しにくい、当時大きな木が近くにあまりなかったというようなことが原因ではなからうか。もっとも、三面体の簡の材質なども含めて、全てを調べてみないことには確実なことはいえないのであるが。

もう一つは、漢簡の編綴についてである。先に縄で簡を編んでそののち字を書いたか、それとも字を書いたのち縄で編んだかという問題である。もちろん両方ありえることがらである。上述の「シルクロードのまもりーその埋もれた記録」展の図録に「建武三年『侯粟君所責寇恩事』冊」の解説があり、「各簡七七字前後、中央付近に綴紐を掛けたためにできた隙間が二条あり、先に縄で編んでその後字を書いたことがわかる」とされている。ところがこの簡をよく見ると、写真ではわからないが、縄を掛けるために字を空けた所の右側面に印が付いているのである。刻齒のようなものではなく、書刀の刃を押しつけて付けたような印である。つまり、この印をもとに字を書いていけば、綴紐を掛ける部分を空けることができるのである。さらに、この冊書が字を書いてから縄で編んだという証拠となるものが第25簡にある。第25簡の1行目の「六百」の下が縄が掛かるので空いているが、よく見るとそこに削ったあとがあり、しかも下の「犍」という字の牛の上部が削り残っているのである。これは空けるべき所にうっか

り字を書いてしまったので削ったのであろう。今回の調査で見ることのできた簡を意識して見た所、縄を掛ける部分が空いている簡は、その右側面を見るとやはり上述の印が付いている。このようなことも、図版の写真では側面は写っていないからわからないことである。

漢簡は紙に書かれた文書とは違い、文字資料であるだけでなく、考古学上の遺物でもあることが、実物を触ってみるとよくわかる。将来的には、実物に触らないと漢簡の研究が深められないようなことになるのではなかろうか。そういう意味でも国際共同研究が必要となるであろう。

夕方7時30分ごろより、研究所の謝所長を始めとして、李副所長、王京科氏、龐述森氏、魏懷珩氏、そして何雙全氏によって、私たちの歓迎と送別の宴がもたれた。蘭州の先生方のご厚情に感謝したい。

【23日（水）】 5時半起床。6時すぎに勝利賓館を出発する。蘭州の空港が街の郊外にあるのは有名な話で、1991年に蘭州に来た時には一般道を飛ばして恐い思いもしたのだが、今は高速道路が通っているために快適である。しかし、距離の遠いことには変わりはない。7時すぎに蘭州中川空港に到着する。8時42分発の北京行きに乗り、私たちは思い出深い蘭州をあとにした。

（門田 明）

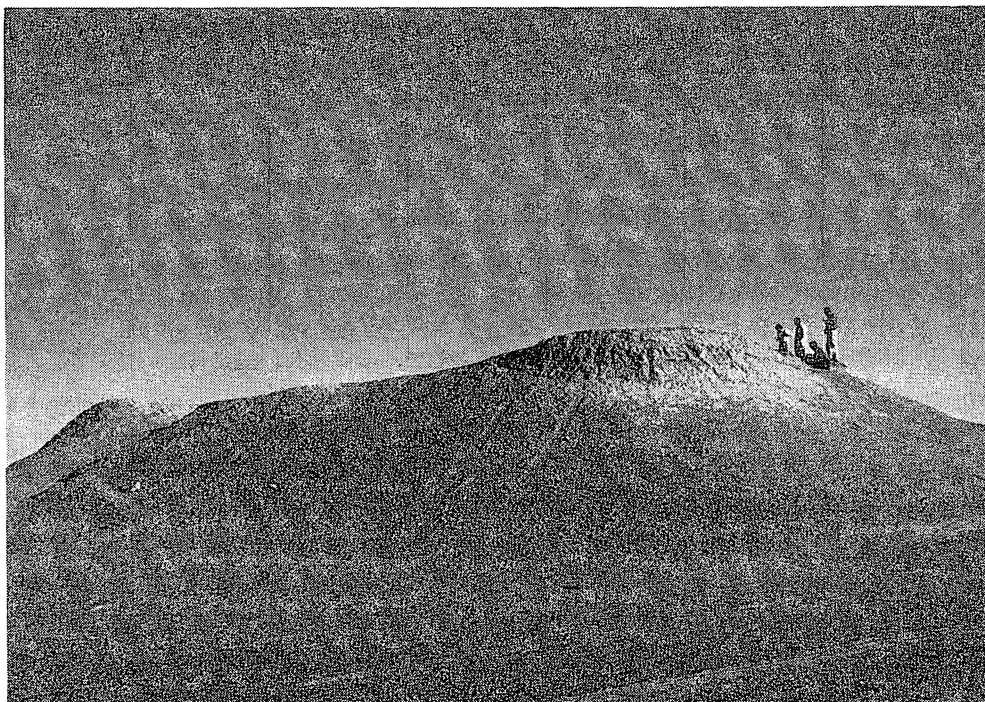


写真1 A 8の遠望

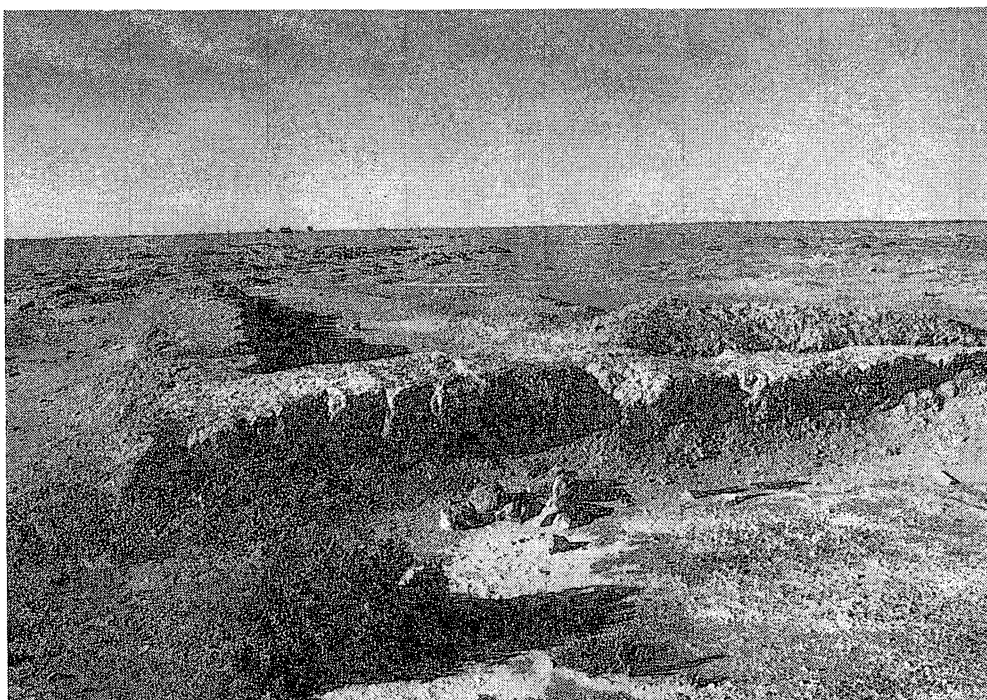


写真2 塙門

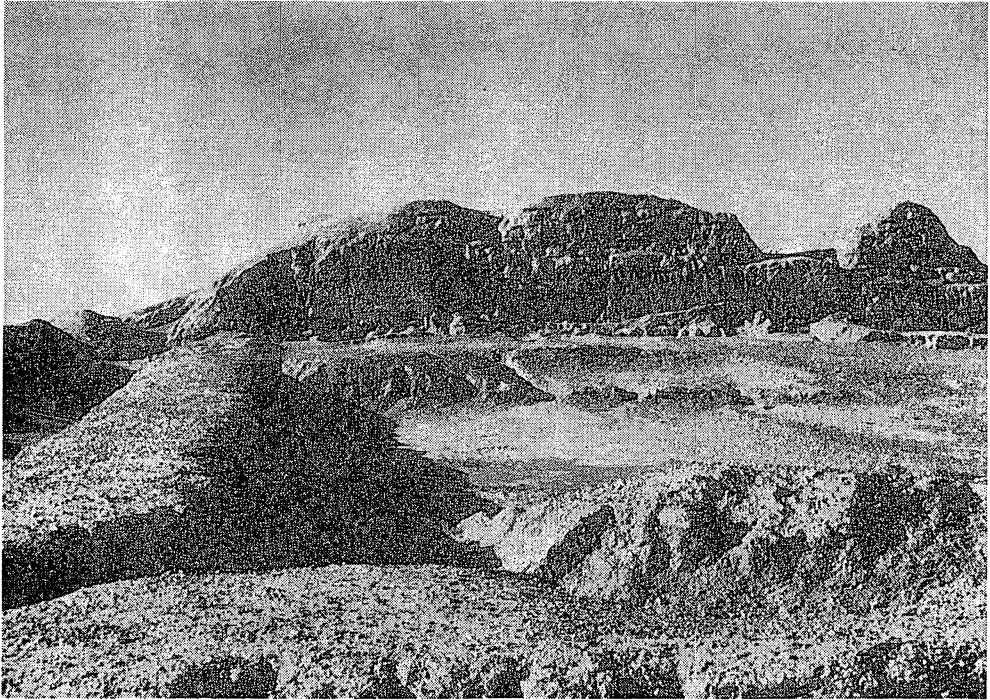


写真3 障

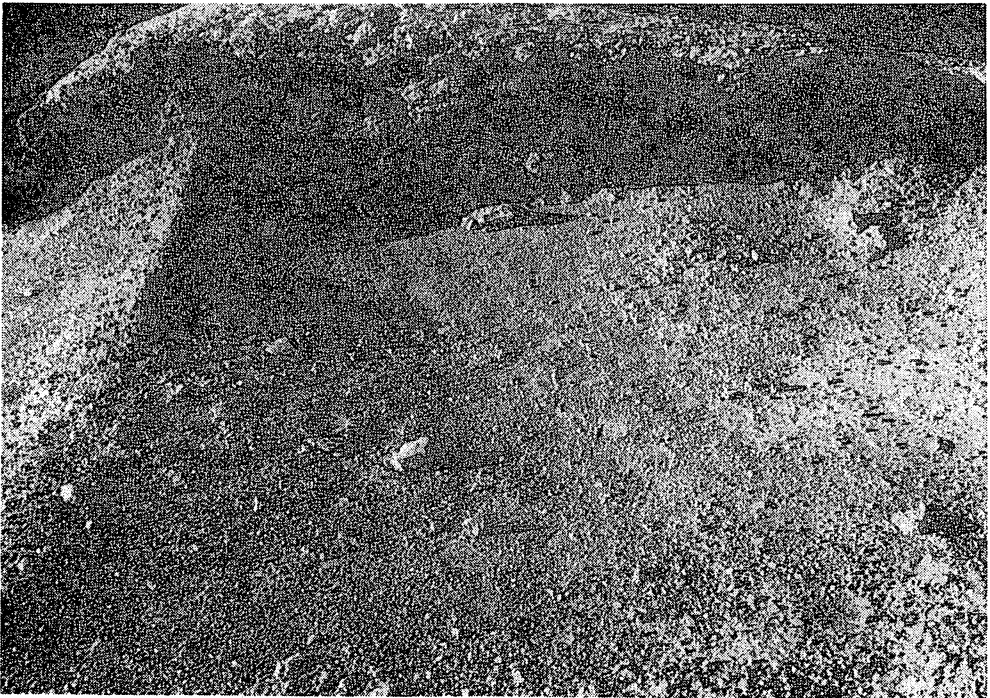


写真4 F22

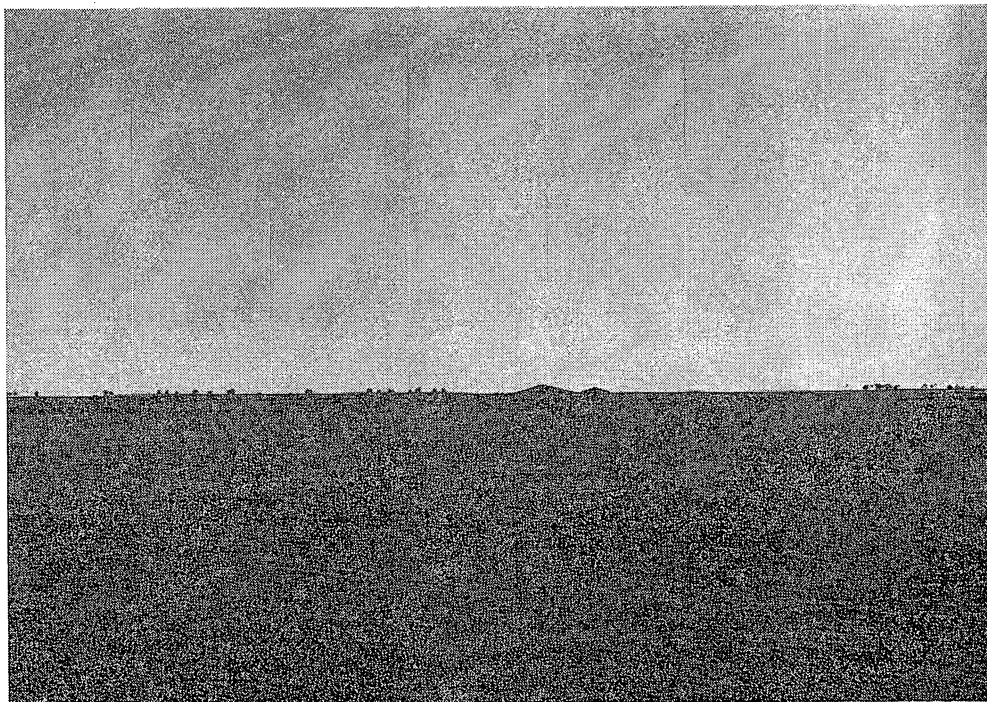


写真5 A8からの遠望

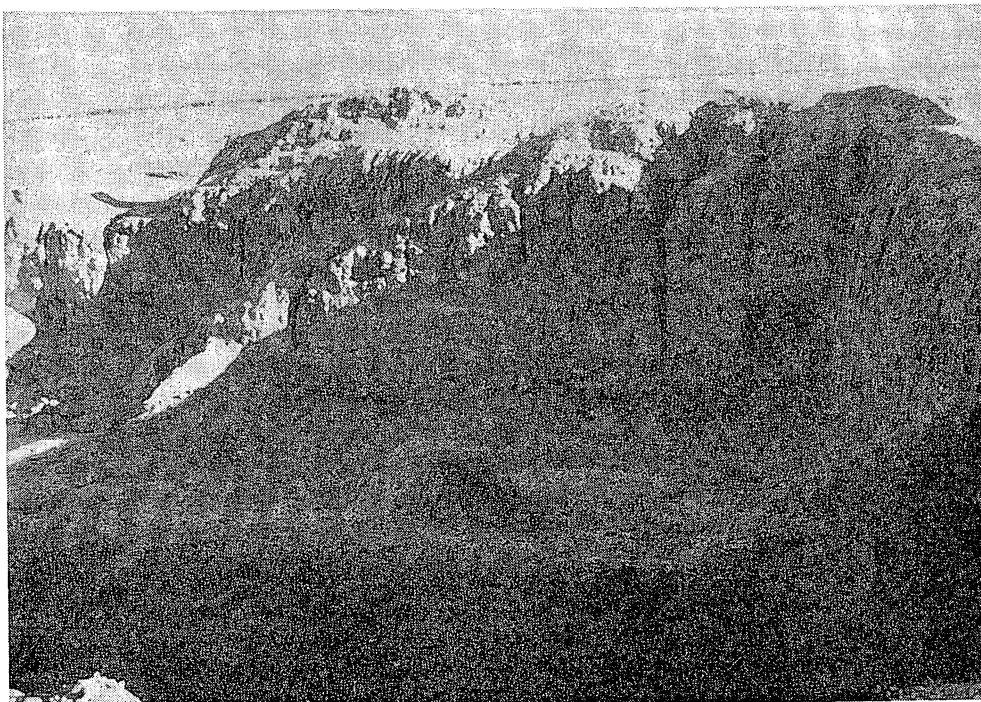


写真6 障内の様子

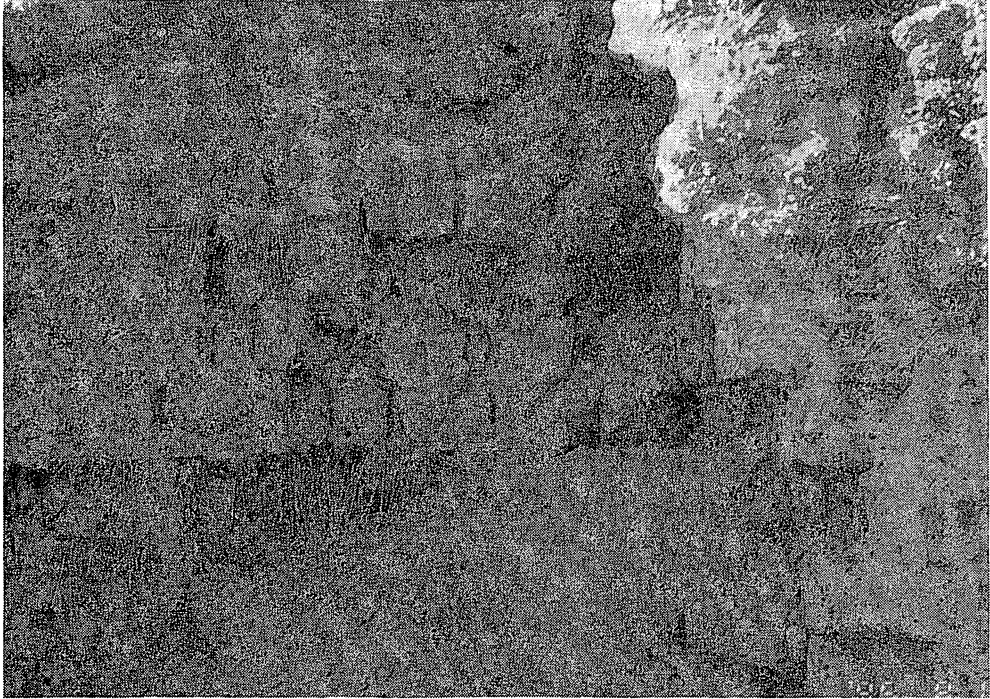


写真7 日干し煉瓦が積まれた状態



写真8 A8のごみ捨て場

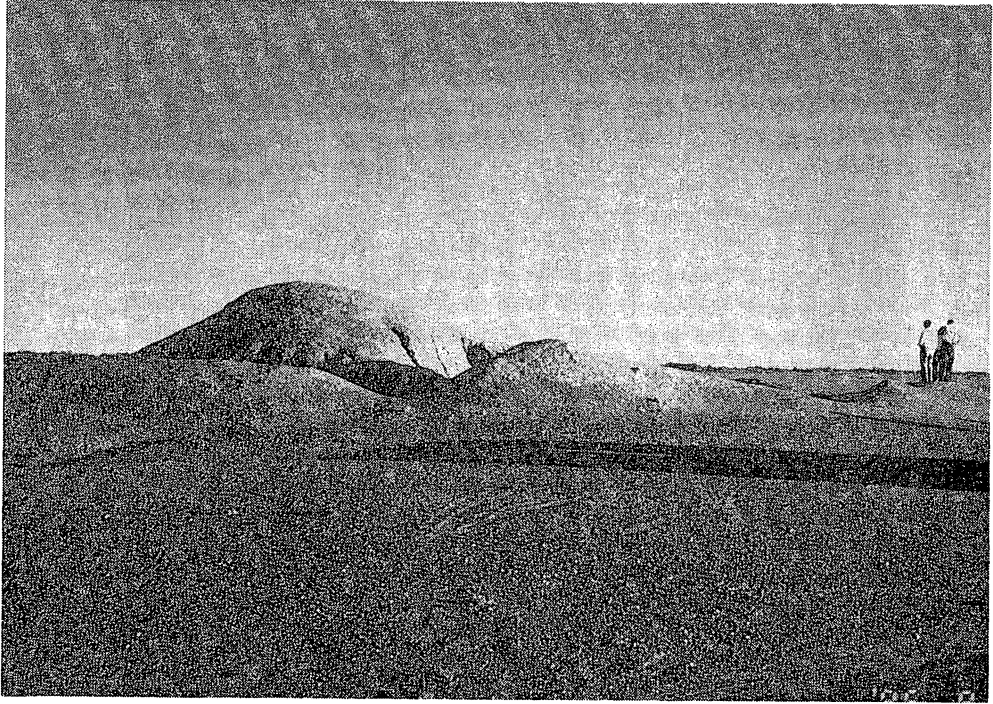


写真9 P1



写真10 K749の北壁と東壁

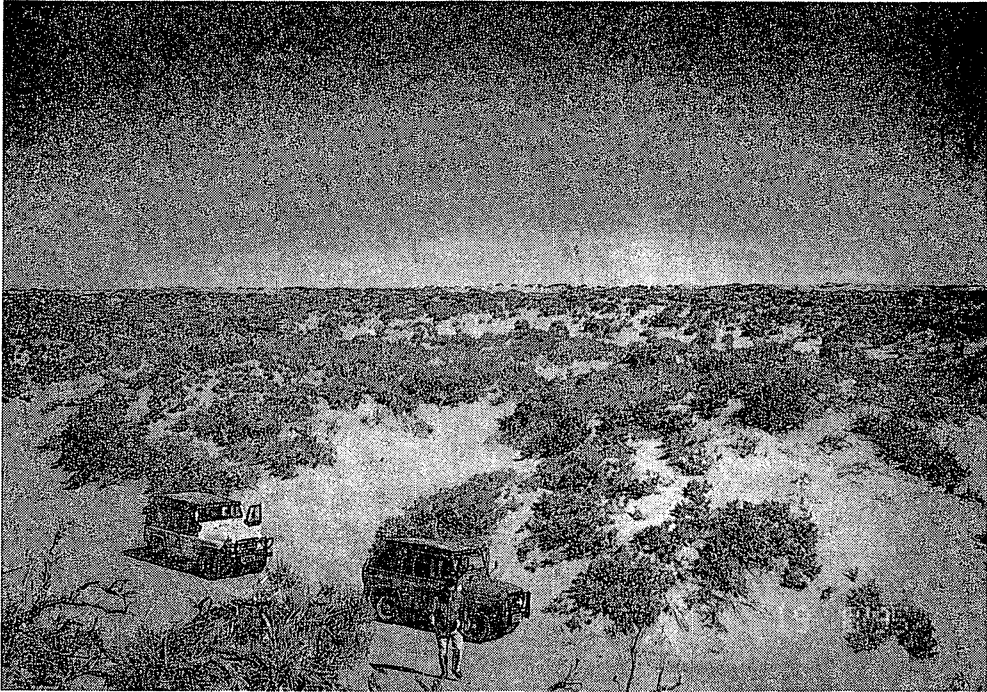


写真11 K749からK710へ向かう途中

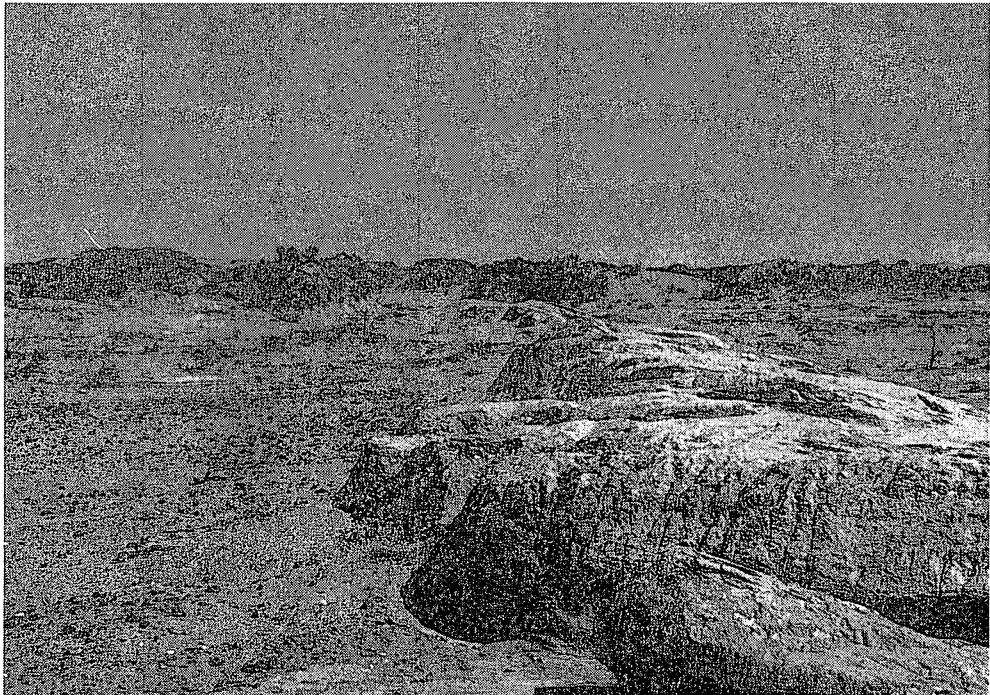


写真12 K710の外壁

写真13 K710の内部

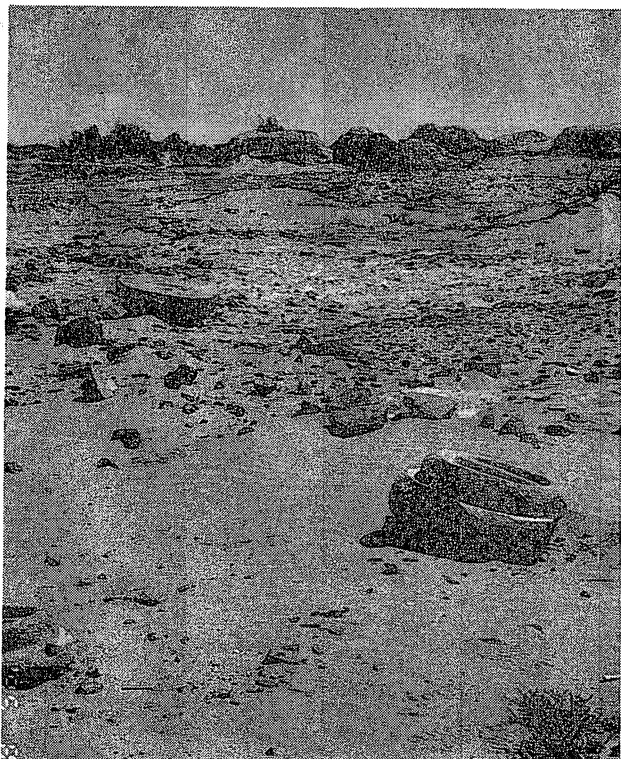


写真14 黒城の仏塔

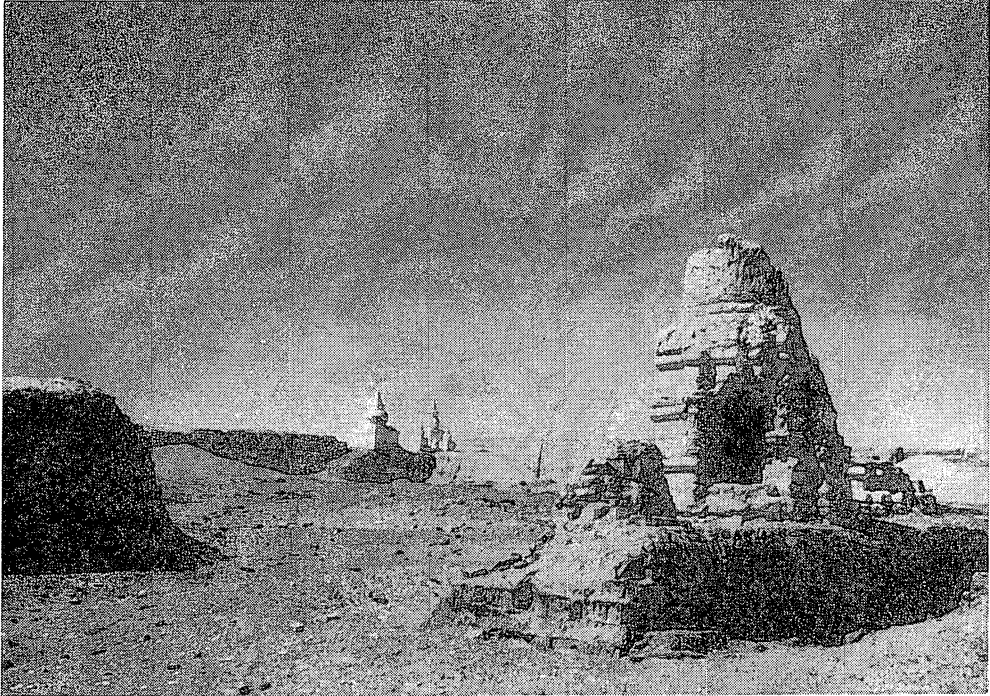


写真15 黒城内の寺院跡

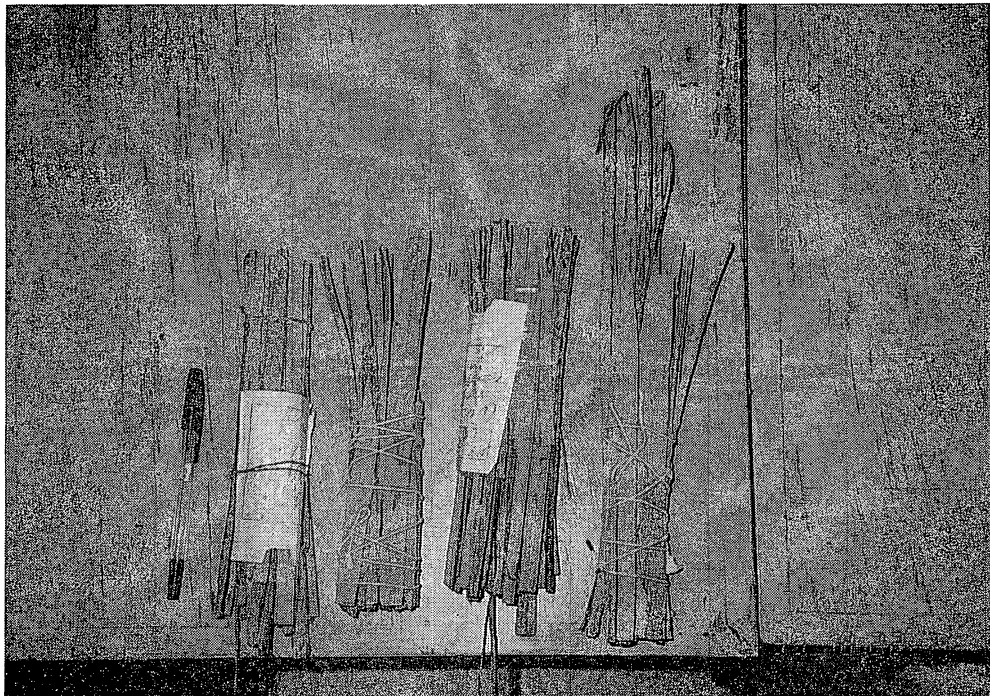


写真16 懸泉置漢簡

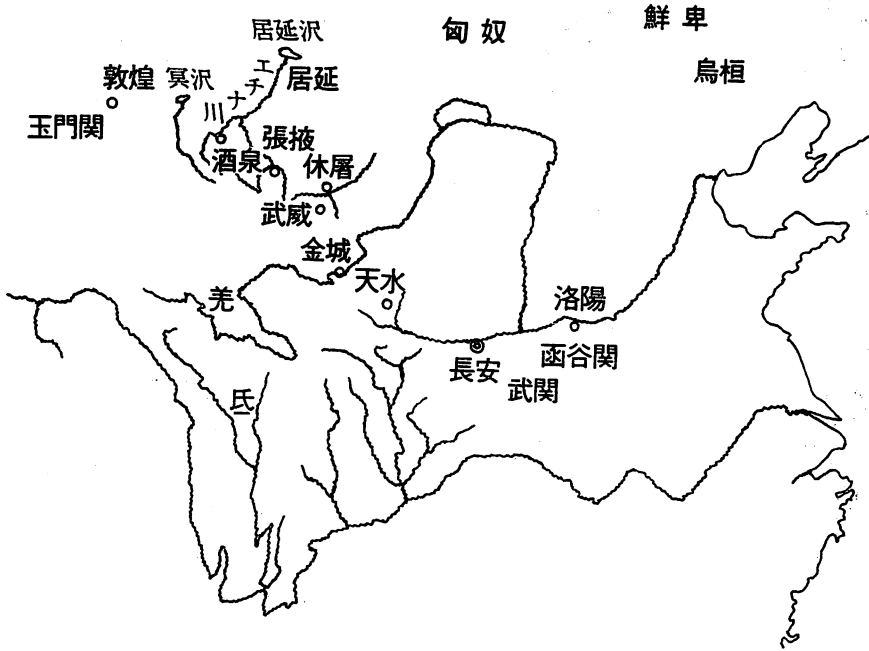


図1 前漢時代の中国

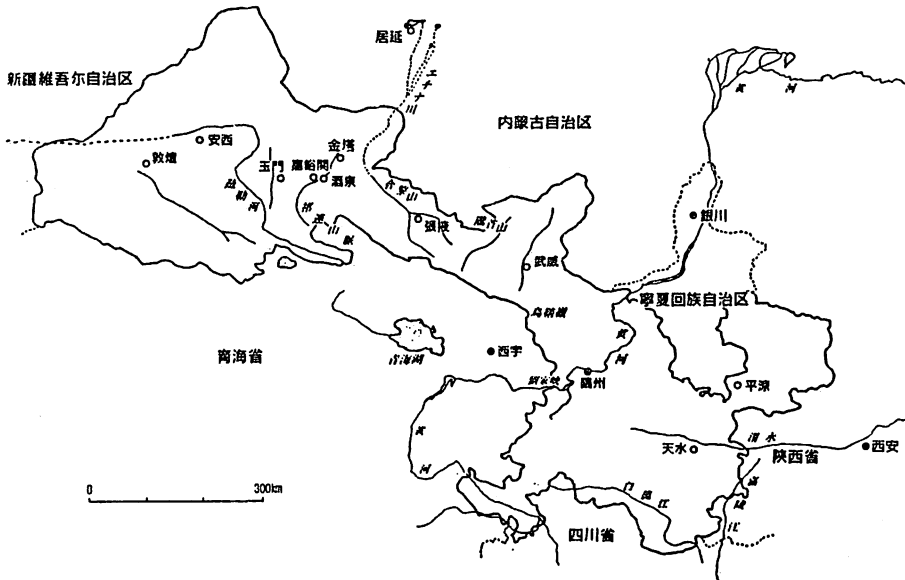


図2 甘肅省及びその周辺

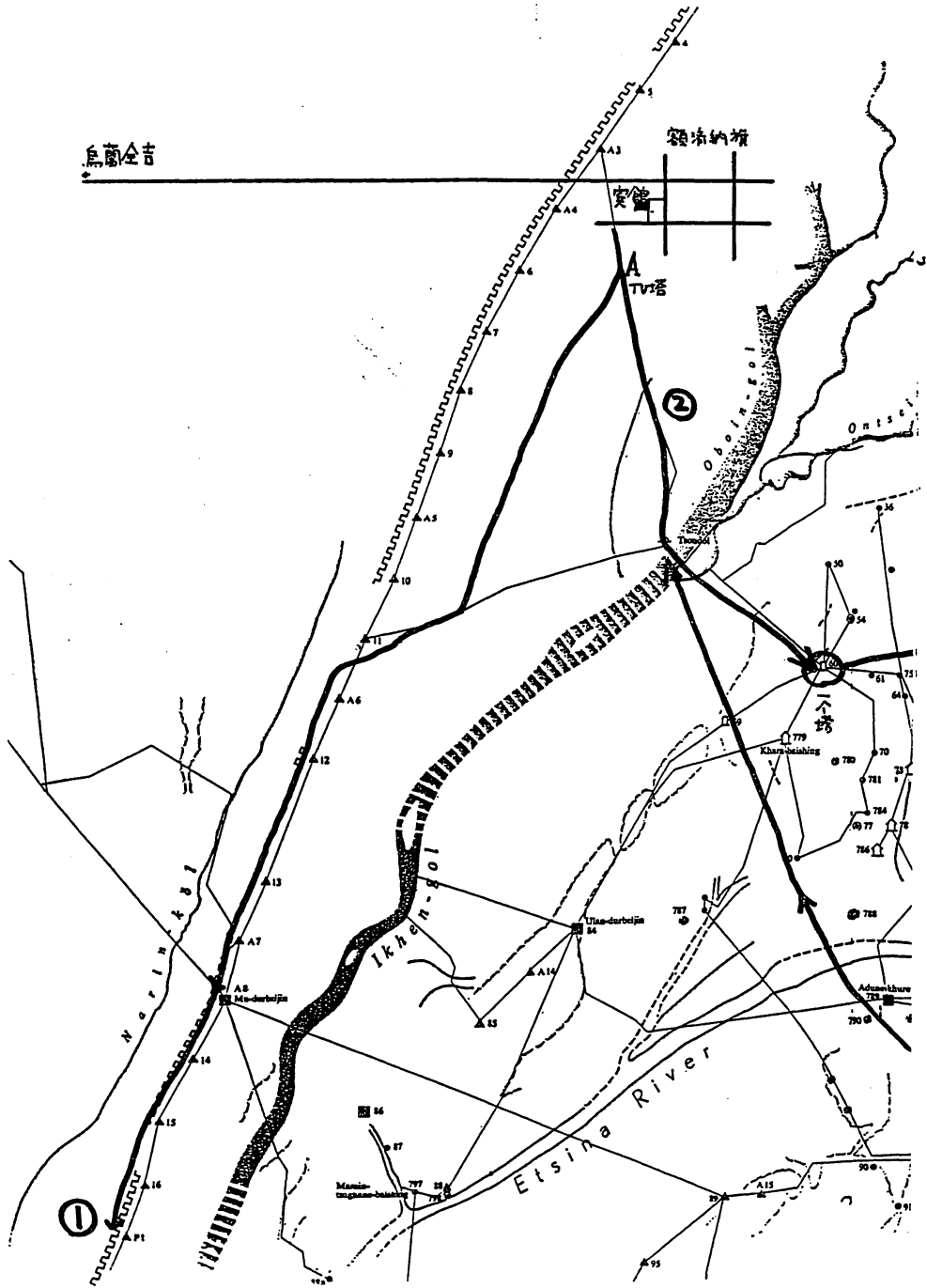
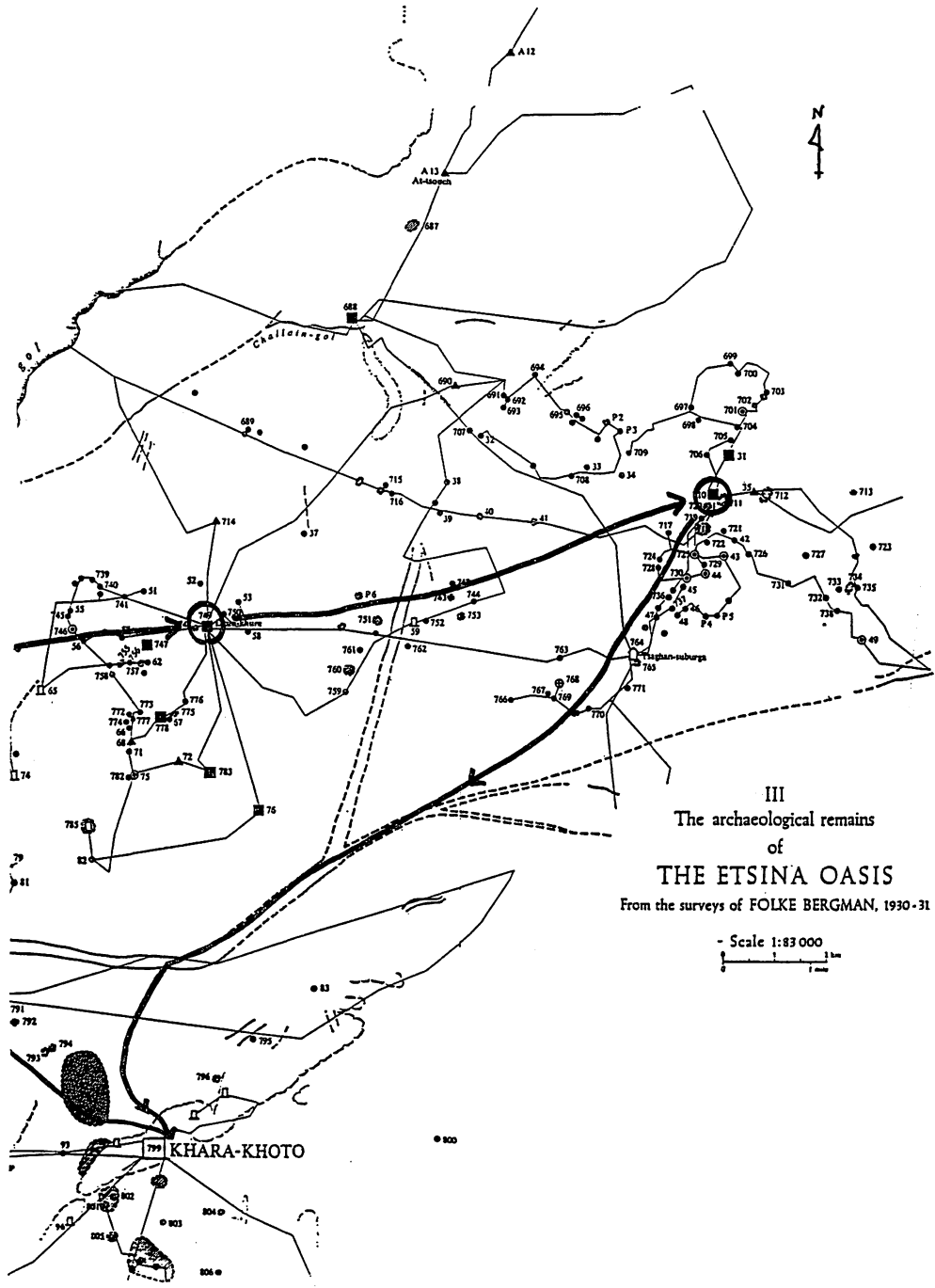


図3 額濟納地域 (ペリイマンの原図を手を加えた)



III
The archaeological remains
of
THE ETSINA OASIS
From the surveys of FOLKE BERGMAN, 1930-31

- Scale 1:83 000
0 1 2
km

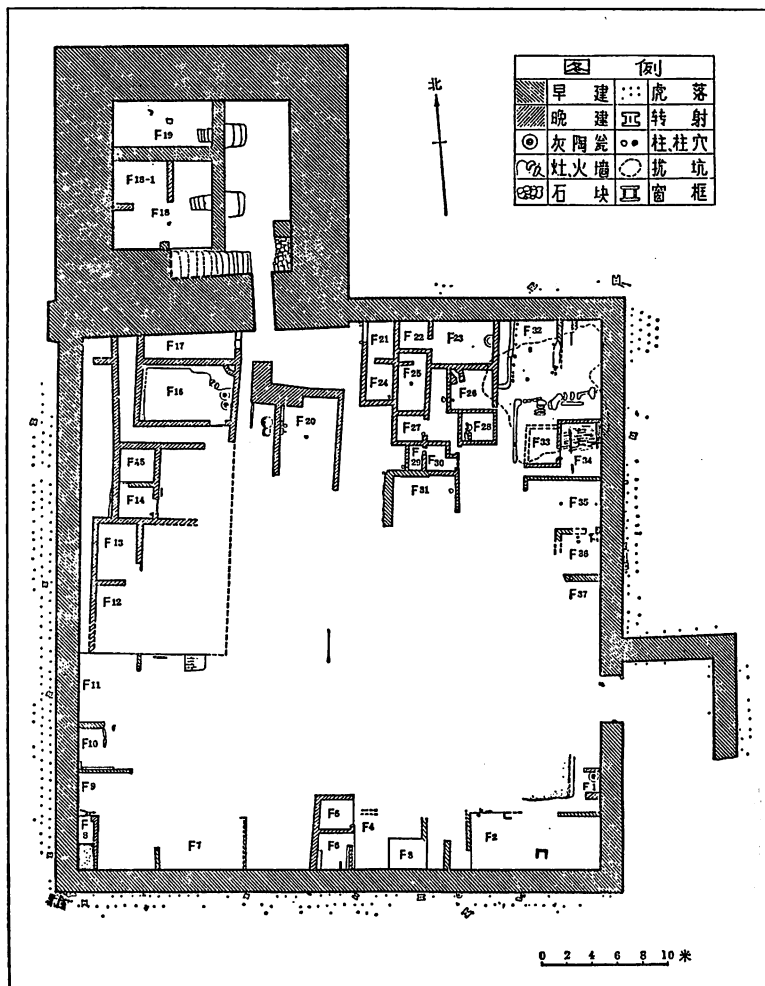


图 4 甲渠侯官遗址平面图 (『文物』1978—1より)

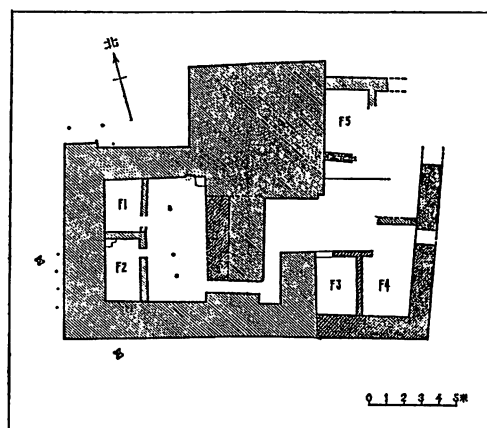


图 5 甲渠塞第四遗址平面图 (『文物』1978—1より)

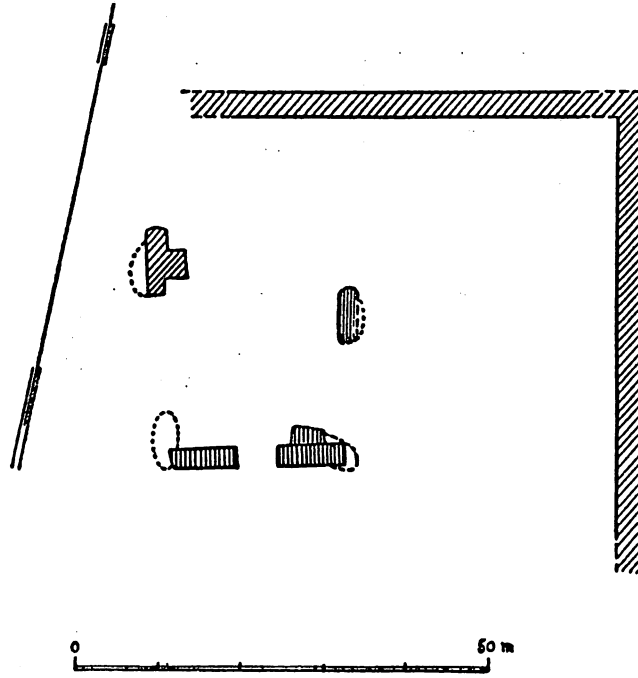


図6 K749の平面図（ベリイマンの報告より）

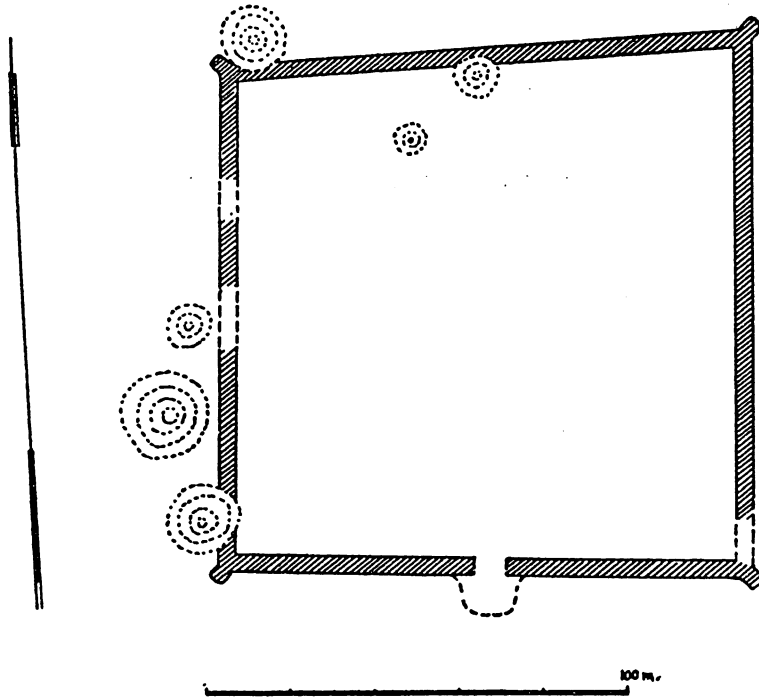


図7 K710（居延城）の平面図（ベリイマンの報告より）

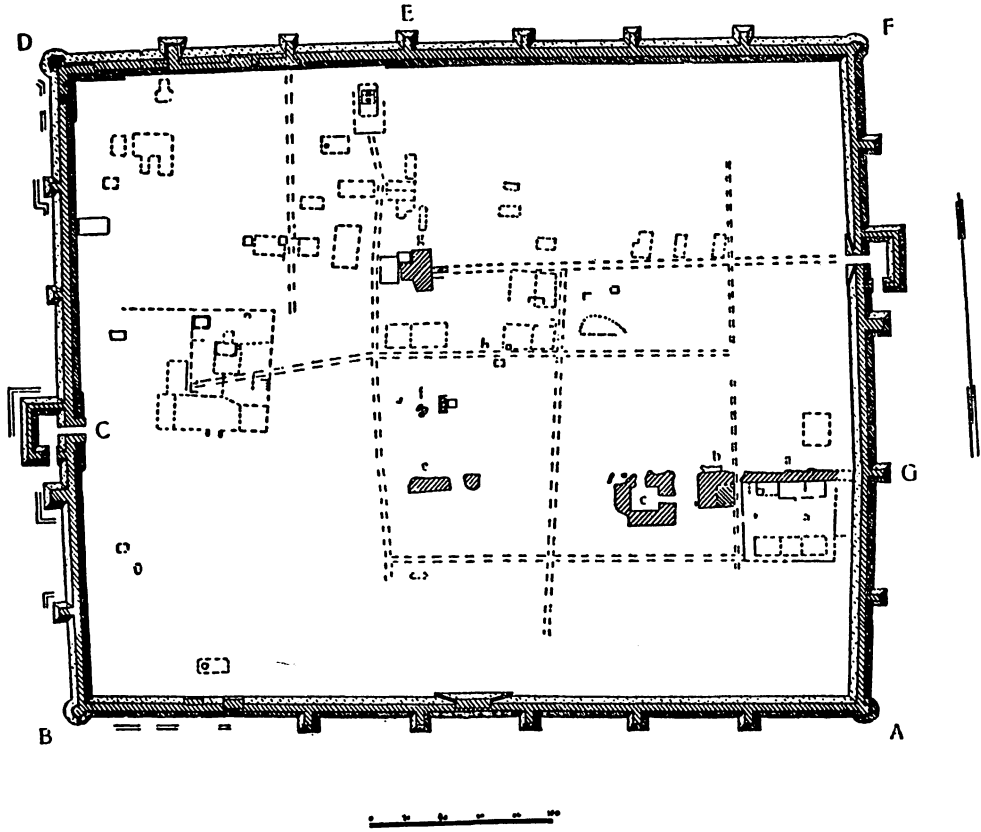


図8 黒城 (Khara-Khoto) の平面図 (ペリイマンの報告より)